OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	プロジェクトをデザインする
Author(s)	木ノ下, 智恵子
Citation	Communication-Design. 2007, 0, p. 55-60
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/8091
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

7. プロジェクトをデザインする

木ノ下智恵子

アート≒コミュニケーションデザイン

アート…

美術・芸術が「アート」と呼ばれるようになって久しい現在、そのあり方も多様化した。まちづくりを目的としたアートイベント。地域活性の一端を担うアーティスト・イン・レジデンス。医療や福祉の現場でのアートセラピー。教育の現場におけるアートワークショップ等々、社会のあらゆる主題にコミットし個々の関係を繋ぐメディアとしてのプロジェクト型「アート」が台頭している。

また、制度や施設などの基盤整備に関しても、メセナ元年の1990年から今日まで急速に変化を遂げた。芸術文化の公的基金の設立や大企業における企業文化部の設置、メディアテークやアートセンターの誕生、国際展の開催といった活発化の一方で、独立行政法人や指定管理者制度が導入され、行政機関の経営的意識やアカウンタビリティー、企業のコンプライアンスなどが問われる時代に突入している。

そうしたハードやソフトの変化に伴い、アートと個人の関係も進化し、これまでのアーティストと観客という一元的なベクトルのオルタナティヴとして、アートボランティアやアートNPOなど、多元的でより個人に根ざした活動が生まれている。

…オルタナティヴ

私自身、公共の複合文化施設（神戸アートビレッジセンター kavc）の開館から美術担当として様々な事業を手がけてきたが、当初、アートの職業は学芸員あるいはギャラリストという程度しかなく、私の仕事はそのいずれとも言いがたかったが、最近ではアートプロデューサーやコーディネーターなどの怪しげな名称で呼ばれている。

…アートプロデューサー

…コーディネーター

さて、奇しくも先の職場と同様に、新たな組織（CSCD）の創設期から携わる事になった私は、アートの現場に従事する立場から少し離れることで、より一層、“アートのあり姿”を俯瞰することが可能になった。それと同時にアートとコミュニケーションデザインは、いずれも観念的で定義しがたく、誰もが分かっているようで分からない。という類似の存在であるとも実感している。

そこで、アートが実社会でポジションを獲得していくプロセスや、その概念を世に提唱する役割を担う組織や機関に必要な事項（マネジメント、プロデュース）が、今後のCSCDの活動の参照になるのではないか。という仮説をたててみる。そうして私が特任教員を務める2009年までの暫定期間、教育プログラムの開発、実践的研究と活動、社学連携を通じて見えてきた、CSCDのあるべき姿を明らかにしていきたい。

…マネジメント

…プロデュース

大阪大学におけるオルタナティヴ

集中授業の「アート・プロジェクト入門──アートイベント企画ワークショップ」は、全学部学生、全研究科大学院生、社会人を対象に開講され、夏休みの約一ヶ月間を中心に、共通課題（新駅開発に伴う参加型アートイベントの企画）について数人のグループで取組み、あらゆる作業

アート・プロジェクト入門

…アートイベント企画ワークショップ

が行われた。「アートとは？　駅とは？」といった抽象的な問いに関するブレーンストーミングから始まって、ミーティングと議事録の作成、企画立案、学内外でのプレゼンテーションを段階的に体験するプログラムが実施された。

このプログラムは、私がかつてkavcの事業で開催したアートマネジメントのワークショップの成功事例をモデルに、共同担当者の教員（久保田、花村、清水）とアレンジした内容だったので、ある程度の効果は想定されていた。ただ、今回は、アートへの関心度も予測がつかない理系と文系の学生（約30名・6つのグループ）を対象にしていたので、個々のモチベーションの差によるグループの崩壊なども危惧されたが、予想以上の反応があった。

「これまで自由に物事を考えたり、話し合うという経験が少ないことに気づき、個人の思いを述べたときに人が感じることや捉え方も異なり、表現する手段も異なることを実感した。」（医学系研究科保健学専攻）

「これまで私の中でアートとは独りよがりなものだったが、この授業を通じて、その企画に訪れる人など多くの人を初めて意識した。それと、いかに伝えるか、なぜ伝えたいのか、という要素が加わった。」（工学研究科）

「感性や創造性は、人に元から備わっているものではく、感性は努力によって磨かれるのだと信じるようになった。CSCDが、今後も「若者が感性を鍛える場」、「実体験の重要さを身をもって知る場」になることを願う。」（基礎工学研究科）

ここでは誰もがアートの非専門家として手探りのままで課題に取組んだ。予め答えが用意されている知識の詰め込みと記憶力の訓練ではなく、正誤がなく幾通りもの筋道と答えが存在するアート（体験学習）では、自身が主体的に関わらなければ得られるモノは何も無い。事実、学生達は本授業を通じて、一時的ではあるが、常に他者という分からない存在と接し、対話と読み解きと摩擦を繰り返して一つを成し遂げるというプロセスを体験的に学べたと言える。

体験学習…

一方、専門性に特化した学内環境と共に、学生諸君が大学の枠組みに安堵して、その感覚や思考性が如何に限定されているかが明らかになり、大阪大学内でのCSCDの役割の一端が把握できた。

- CSCDは多くの教員が学外からの赴任であるからこそ、外部的なスタ

ンスを保ちつつ、大学や学生と接することが可能であること。

- 文化的・創造的な感性と専門技術の人間化に関するハイブリッドなセンスと発想力を持ったCSCD系エリートの育成を提唱すること。
- 専門性に特化した蛸壺状態に陥りやすい大学の研究機関において、CSCDは専門領域の専門領域の異なる人材が集い、「コミュニケーションデザイン」という新たな領域を開拓するために、個々の専門性を融解しなければならないこと。

等々、CSCDは大阪大学における、オルタナティヴとして最も有力な組織になれる潜在能力があるのではないだろうか。

大学の新たな使命とサバイバル

近年、教育研究機関である大学に「社会貢献」という新たな使命が加わり、地域社会でも大学の知の還元への関心が高まっている。大学の社会的機能は、獲得された知識が個人や社会に伝達・応用されなければ全うしない。

…大学の「社会貢献」

CSCDは、その成り立ちや関わる教員の出自を考慮すると、大学の三機能（教育・研究・社会貢献）を相互的に実践し、いわゆる“阪大らしさ”のイメージや価値を多元的に刷新することが可能な、社会とのインターフェースとしての役割が担える組織だといえる。

…社会とのインターフェース

そうした背景を踏まえた出来事の創出が、CSCDのオープニングイベント「CAFE BATTLE/カフェバトル」[*1]や、京阪電鉄とアートNPOとの社学連携プロジェクト「中之島コミュニケーションカフェ（ラボカフェ・プロジェクト）」[*2]である。

…CAFE BATTLE/カフェバトル
…社学連携プロジェクト
…ラボカフェ・プロジェクト

この試みはいわゆる広報事業ではなく、不特定の関係者間で情報共有と相互理解を得て、CSCDのあるべき姿を創造するパブリックリレーションズの役割を果たしている。

…パブリックリレーションズ

コミュニケーションデザインの実践的研究に際しては、さまざまな専門領域における物事の捉え方や考え方を横断・交換することにより、新しい発想や可能性に繋がることがある。また、技術的問題が障壁となっていたビジョンやアイディアが、多領域の人たちとのディスカッションにより、実現のきっかけを見出すこともあるだろう。だからこそ、自らが率先して、他大学・企業・行政や、学生とは異なる学び手（個人）と出会いが不可

欠であり、社会との連携が必要なのだ。

更にこれらのプロジェクトは、駅などの公共空間の新たな活用法としてのコミュニティスペースの可能性を示唆し、研究者自身が一般大衆を前に対話を広げて都市生活者にセルフラーニングの機会を設けることで、未来の大学を想起させる社会実験としても機能している。

社会実験…

こうした大学の知の還元という社会貢献の一方で、その実現のプロセスでは、社会のあらゆる価値基準と向合い、既存の大学の論理やシステムと照合しながら心身を開く度量が試される。社学連携は脆弱なモラトリアム機関としての大学を変革するためのサバイバルツールなのかもしれない。

CSCDの資産運用

アーティスト…

「アート」が成立する条件には、アーティスト（創り手）の【言葉にならないけれど根拠のない自信に満ちた創造力による表現】と、観客（受け手）の【五感をフル稼働させた想像力による美しき誤解】の二つの能動的な【ソウゾウ力】による相互作用が不可欠である。その両者の繋ぎ手として、アーティストの共犯者、あるいは、最前線の観客になって、媒介のクリエイティビティーを発揮することが私の仕事である。

ソウゾウカ…

ただし、CSCDでは、これまでのアートを主語とした出来事の創出ではなく、コミュニケーションデザインという新たな概念が主語になった。

一般的に通底する経済や時間の価値基準とは別次元で自らの人生をサバイバルする存在として、アーティストと研究者は同類だと認識する。一方、行政や企業による文化事業や支援が困難になってきた今日、国立大学の無担保のバリューと可能性を実感している。

文化装置…

社会のあらゆる機関と…
繋ぐメディア

プロジェクト…

そこで、CSCD（大阪大学）の資産である研究者達や、大学という文化装置を、社会のあらゆる機関と繋ぐメディアとしてのプロジェクト（計画・開発事業）を通して主体的にプロデュースすることが、学者とは違うスタンスで本学に関わる私の組織と社会への貢献だと自負している。

それと同時に、そうした実践を通じた試みが「パブリックアートの新形態として台頭するアートプロジェクトの美学・芸術学的観点からの位置付け」と「アーティストの職能やアートセンターなどの最近年の文化装置の役割に関する社会学的考察」といった、私自身の研究を可能にする。

さて、CSCDの第一ステージ終了までの3年間、何が実現できるのか。

組織として個人として、今よりもっとセンシュアスに、ラジカルに他者と接し、自らがインターミディアリーな存在となって、更なる価値変換や新たな価値を創造すべく、CSCDという未知なるプロジェクトのデザインを手がけたいと思う。